



ラッキーナスビ2.5



学びの場を社会に開こう!!

協働するから

研究も未来も開ける

熱気あふれる教室で...

3年生の総合的な学習の時間では、生徒たちが研究レポートの作成に取り組んでいます。テーマは「君たちは宮崎のためにどう生きるか」です。生徒たちは、自分が将来就きたい職業を分析した上で今ある仕事を新たに創造（イノベーション）していく研究に取り組んでいます。宮崎をよりよくする（社会実現）とともに、自分のキャリアをつくっていく（自己実現）の「二輪走行」は、難しくもあり、やりがいもあるテーマです。

そんななか、今回は、本校の卒業生でもある高校生（宮崎大宮高校・文科情報科）、宮崎大学教育学部、地域資源創成学部の大学生、そして大学の先生方をアドバイザーとしてお招きし、中学生が研究を進めるためのお手伝いをしていただきました。

会場となった被服室に、中学生が次々とやってきます。はじめは緊張した面持ちで説明を始めた中学生でしたが、高校生、大学生、先生方のあたたかいサポートのおかげで、少しずつ緊張もほぐれ、研究推進について様々な視点からアドバイスをいただくことができました。今回の活動に参加してくれた、ある高校生がこんなことを言っていました。

「高校での探究活動に似た雰囲気・熱気がありました。」
熱気あふれる教室で得たヒントをもとに、さらなる研究推進が期待できます。

「高校での探究活動に似た雰囲気・熱気がありました。」



“あこがれ”の力

宮大附属中の伝統の一つに、「ファミリア活動」と呼んでいる活動があります。先輩が後輩を導き、ともに成長していくこととする活動です。このファミリア活動最大の良さは「先輩のようになりたい」と自然に思えるようになること、つまり「あこがれ」をもてるようになることなのです。

この「あこがれ」の力は、威力抜群です。社会学者の宮台真司さんは『14歳からの社会学』（世界思想社）のなかで、次のように書いています。

← 熱気あふれる被服室の様子です

「自分から会いに行く」ことで、ラッキーチャンスはやってくる。

ぼくたちがものを学ぼうとするときに、どういう理由があるだろう。まず1つ目に挙げられるのが「競争動機」(勝つ喜び)。周りの子と点数を競い合うとか、人よりも高い偏差値の学校に合格したいと思って受験勉強をするのは、この「競争動機」による。

2つ目に挙げられるのが「理解動機」(わかる喜び)。「自分の力で問題が解けた」とか「自分の考えをうまく説明できた」と感じる喜びだ。戦後の日本の教育は「競争動機」と「理解動機」に集中して議論がなされてきた。だが、実はもう一つ大切な動機がある。

それが「自分もこういふスゴイ人になってみたい」と思う「感染動機」だ。直感で「スゴイ」と思う人がいて、その人のそばに行くと「感染」してしまい、身ぶりや手ぶりやしゃべり方までまねしてしまう。そうやって学んだことが一番身になると僕は思う。

もちろん、今回の活動は研究を推進するためのものでしたが、同時に、上級学校でがんばる先輩たちへ「あこがれ」をもつことのできる場にもなっていました。

ここで大事ななのは「自分から行く」ことではないでしょうか。勇気を出して、自分から人に会いに行き、協働してみよう。この経験を繰り返した分だけ自分の可能性やキャリアを開くことになるのかもしれない。今回の「ナスビの売り方」はこれです。いかがでしょうか？

自分から人に会いに行き、協働することを経験して、自分の可能性やキャリアを切り開くラッキーチャンスを獲得することができるようになる。